

長距離急曲線トンネルを推進

アルティミット工法協会が見学会

切り羽にビームカッター

超長距離急曲線トンネルの推進システム「アルティミット工法」の見学会が19



20の両日、川崎市の雨水貯留管の建設現場で行われていた。同工法の理解促進と普及に向け、アルティミット工法協会が主催する見学会で、2日間で発注者やコンサルタント、協会会員企業などから約200人が見学会に訪れる予定だ。

同工法は、従来工法で困難だった長距離、急曲線トンネルの推進を、従来の雨水貯留管工事と異なり、都市型水

トンネルの推進を高精度に可能にしたセミシールド工法。掘進機の切り羽にビームカッターを装着した「ダブルカット方式」を採用し、強力な攪拌作用に加え、添加剤や泥水を注入して土砂の流動化を促

害を防ぐため下水道事業の一環として、延長2560m（うち1期工事は延長1760m）の雨水貯留管を地下に建設する工事で、施工は大成建設・前田建設・フジタ・東急建設・白石・浅沼組JV。

同工事のうち、近接する浅川ポンプ場でくみ上げた下水を貯留管の立坑側部（バシル部）に引き込む流入管掘削に同工法が採用されており、直径2600mmの流入管を延長約78mにわたって掘進する。途中に最小曲線半径40mの急曲線部があり、急曲線部の入り口付近、延長約50m程度までトンネル掘進を終えた。

19日午前の見学会には発注者ら約50人が参加し、トンネルの切り羽付近まで入り、同工法の特徴を確認し

た。写真。今後、都市部を中心に超長距離急曲線トンネルの必要性が高まると予想されるだけに、見学会は熱心に質問を繰り返していた。